

【資料紹介】

新聞『大東文化』（1978～1979年度）の 囲み記事「大東人」

谷本宗生

はじめに 囲み記事「大東人」について（本学関係者 19 名）

大東文化大学創立百周年（2023 年）に向けて、もっか関係資料などの検討吟味を精力的に行っているが、その過程のなかで発掘した注目する資料について本稿では紹介したい。学校法人大東文化学園の機関紙である『大東文化』の紙面において、本学関係者らの寄稿記事「十字路」のあとを受けるかたちで、紙面 1 面の 3 分の 1 ほどのスペースを占める、囲み記事「大東人」（大学広報センターによる、本学関係者らのインタビューのまとめ）が、『大東文化』第 295～314 号（1978 年 4 月～1980 年 2 月）で連載されている。連載された本学関係者 19 名の内訳は、卒業生 2 名・理事長（OB）1 名・職員（OB）1 名・専任教員（OB も含む）12 名・父兄 1 名・学生 2 名である。男性 18 名で、女性 1 人であった。

インタビューの対象となった本学関係者らは、1978～1979 年度内に学部・学科や研究科の長、理事長や幼稚園長などへの就任、または、様々な分野における受賞などのタイミングで選出されているといえよう。対象者のまさに転機ともなった、若き学生時分に母校や他の学校で過ごした青春時代について、とくに注目が置かれている。その趣旨としては、主要な文化・経済人や芸能人らを対象として、その魅力的かつ個性的な人生の回顧を目的とした、日本経済新聞の「私の履歴書」や東京新聞の「私の上京物語」などとも共通している。

ちょうど、本学も創立 50 周年（1973 年）を経て、いっそうの学部・学科や大学院の増設拡充をはかるうえで、学内の研究・教育環境のさらなる整備がもとめられ、狭隘な板橋校舎において高層棟の研究・管理棟の

建設（1980年5月竣工）を行った時期であった。インタビュー取材の囲み記事「大東人」は、対象者の主体的な生き様を示す関係者の回顧談として、ときに波乱に満ち苦勞がたえなかった本学先人らの足跡であり、まさに本学をしかと支えた大東人ら19名の赤裸々な歴史的な記録資料として、忘れてはならないとても有意義なものであろう。

1 囲み記事「大東人」の抜粋

1-1 大東人：上條信山（芸術院賞受賞が決った）

略歴：長野県松本市出身。長野師範学校卒。大東文化学院本科9期、高等科16期卒。本学講師（1956～1984年）。書家。本学書人OB会「桐心会」会長。1969年、内閣総理大臣賞受賞。第9回日展出品作「汲古」に対して芸術院賞が贈られることが決った。インタビュー：「大東文化」1978（昭和53）年4月15日、295号、1面所収。

[[上條]先生が習字を始めたのは小学校へ入ってからだという。…受持[ち]の三村先生が黒板へチョークで書く形のいい文字が少年の胸をうって、[三村]先生のようにうまくなろうと思った。六年生の夏休みに[西脇]呉石の三体千字文を宿題に与えられ、子供ながらにそのよく整った美しさに魅せられ、暑さを忘れて机に向って一夏三冊の清書綴を完成した。『呉石先生の千字文に出会ったことは少年時代の私にとって大変な仕合わせであった』と[上條]先生は記している。…長野師範から大東文化学院本科へ進んで書道と漢学の道はしだいに広がり、卒業後、当時の成蹊中学校に四年間勤めて再び大東へ戻って高等科生になってからは、土屋竹雨先生のもとで大東書道の旗を高く掲げ、全国の高校、専門学校の墨友に呼びかけて全国高専書道連盟結成の音頭をとってまとめ上げた。…成蹊で約二十年、昭和二十七年に東京教育大学へ迎えられて四十六年に教授で退官するまで約二十年、さらにこの間池袋時代から約四十年間本学に出講して今なお母校の後進の指導に当たっている一方、会員一万を越え

る書象会を主宰して老いを知らない。芸術院賞受賞を報じた新聞は[上條]先生の書風を『重厚で雄渾な表現』あるいは『知性に満ちた雄勁な筆』と評した。[上條]先生は『師範生のころ野球をやって腕っぷしが強くなったおかげ』と笑ったが、上條投手の十字架球は長野県では並ぶものがなかったという証言もある。信山を号に選んだ愛郷心が、一昨年県教委が長野市と松本市へ建立した『信濃の国』の歌碑に無償で揮毫した」(本文中、適宜〔 〕を谷本が付す。以下、同)

1-2 大東人：佐々木一義（文学部長に就任した）

略歴：福岡県出身。東京帝国大学文学部卒、同大学院修了。文学博士。九州大学名誉教授。1974年4月から本学教養課程教授に着任。哲学・倫理学を専攻。ドイツ留学、ハイデッガーに師事。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年5月15日、296号、1面所収。

「[佐々木]先生は『ゆとりがあるということはいいことです。学問でもそうですが、いちずに打込んでしまうと気持ち[ち]の余裕をなくして回りの状況がわからなくなり、自分が背のびしていることさえ自覚できずに、いったん行き詰まるとどう処置していいか判断がつかなくなります。心にゆとりがあれば機転をきかして新しい発想もできます。それが大切なことです。本学[大東文化大学]の学生諸君にはそのゆとりがあります。純朴で素直で、礼儀正しい人が多い。現代日本の若い大学生のほとんどが失っているものを今もなお失わずに保っているように思います』…と。…[佐々木]先生は郷里の旧制中学生だったころから哲学系の本を読み始め、佐賀高校、東大と学生時代のある時期まで哲学、倫理学にとりついて離れなかった。家と親戚の間のもめごとを解決するための人間探究という切迫した動機がこの道へ駆り立てたという。大学では和辻哲郎教授の指導を受けた。あるとき和辻氏に『佐々木君、君は焦りすぎているんじゃないのか』と指摘されて衝撃をうける。学問の間口が狭いと重心が高くなって倒れ易く、倒れると持ち直すのに手間がかかるが、

富士山のように裾野を広くしておけば倒れる心配がない。雑学でもいいから専門外の本も読んで、しっかりとした土台をこしらえておけという忠告だった。心にゆとりを－佐々木先生はこのときこのひとことをしっかり胸に刻んだ。それからイブセンやドストエフスキーを、樗牛や漱石を読んだ。野球をやり弓をひき、歌舞伎を観た」

1-3 大東人：篠原武英（経済学部長に就任した）

略歴：山梨県出身。東京外国語大学独乙語部法科卒。1967年本学教養部兼任講師、1969年本学経済学部教授。元報知・朝日新聞記者。新聞社でニューヨーク特派員、アメリカ総局長などを務め、戦後の池田・ロバートソン会談やキューバ危機、ケネディ大統領暗殺を報道。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年6月15日、297号、1面所収。

「[篠原]先生は十年前まで朝日新聞の記者だった。…東京外語では独乙語部法科だった。甲府商業時代、ドイツ語を習って世界をみてやろうと心を決め、世界をみるには『新聞社の特派員になるのがいい』と読売新聞記者の年上のいここに教えられた。…召集解除になって朝日[新聞社に]入社、北京総局で終戦を迎え、総局の跡始末をして二年後にしんがりで帰社する。法科出の[篠原]先生が『経済』にかかわったのは帰国して経済部員になってから。池田勇人氏の知遇を得たのもこの時期である。それ以後、再度のアメリカ勤務、本社勤務の二十年間は、躍動する国際政治・経済に直面し、激しく去来する世界の姿を冷徹な記者の目で見守り、報道しつづけた。…『仕事を通して生きた勉強は人一倍しました。その時その時の生きた教材がいつも目の前にころがっていましたからね。だから教壇に立つといつも思いますよ。自分がハダで学んだことを学生諸君に十分に伝えることができたら、とね』。学生に期待することは『国際的に役立つ知識を吸収すること、外国へ出るのに備えて自分を特長づけること、それには第二外国語を軽視してはいけません』という。そして－諸君とこの大学とは運命共同体であり、卒業後も変わることはない。大

東文化を大きく盛り立てることは自分自身が大きくなることであり、ひいては諸君の子供たちに誇りと自信を与えることになる－『入学式の学部長訓示で述べたこの言葉が経済学部のみならず学生に対する私の願い』と口調をあらためた」

1-4 大東人：清水阿や（英米学科主任になった）

略歴：日本女子大学国文科卒、東洋大学文学部国文学科卒、東京文理科大学文学部英語英文学科卒。東京学芸大学名誉教授。1975年本学文学部教授。本学初の女性学科主任。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年7月15日、298号、1面所収。

「場面は昭和初年。清水先生が岐阜県の高女を卒えて目白の日本女子大へ入学したのもちょうどこのころだった。製糸工場を経営していた父親は家業を一人娘につがせることより、医師か法曹家にと望みをかけていたようで、父の希望に含まれていなかった国文学を選んだ…けれども、傾きかけた工場を閉鎖して上京した一家は、慣れない異郷での生活の苦しみに耐えなければならなかった。[清水]先生は以後十二年の学生時代を『いつも貧乏と手をつないで』過ごすことになった。国文学を本格的に勉強するためにさらに東洋大学へ進み、初めてここで男子学生と席を並べることになる。…学問への興味が深まるにつれて、学費の調達に苦勞して家庭教師などの仕事もした。…『貧乏は覚悟のはずであったのに、手縫いのブラウスや破れ靴に貧困の悲しさをつくづく味わいました』とさりげなく語る。しばらく間をおいて「それも後になって考えると、いろいろ障害を克服しながら勉強したことで身についたことも多かったように思います」とも。『国文が少しわかってくと他の文学とのかかわり合いを勉強したくなりましてね。東洋大学には中国文学や印度哲学がありましたが、少し英語ができたので、やるなら英文学をと思ったりました』。[清水]先生にとっては、英文学は国文学の延長であり、国文学は英文学の前半であるようだ。そして東京文理大の英語英文学科へ。…『学

生時代もその後の長い教師生活も数が少[な]い存在として珍しがられたことは確かですが、それによって差別をうけたようなことはなく、学問や教育の上での同行者として温[か]いおつきあいを賜りました。こんど学科主任にいただきましたのも皆様のおかげですから、互いに融合して、それぞれの分野で力を十分に出していただき易いようにすることに非力ながら務めたいと考えております。…『イギリスの中世の長老が若い三人の女性に求められて書いた本『アンクリーン・リウル』に、祈りの時間をさいても読書をすること、読書はいかに祈り、何を祈るべきかを教えると述べています。天から享けた自然の美しさに豊かさが増せば、それにつれて周りを見まわす余裕もでき、思いやりの心も生れて、ますます光り輝くでしょう』…これは[清水]先生から女子学生へのメッセージと聞いた」

1-5 大東人：斎藤徳三郎（本学吹奏楽団の指揮者）

略歴：水戸商業学校卒。志願して陸軍軍楽隊に入り、陸軍戸山学校教官となる。1962～1965年、陸上自衛隊中央音楽隊長（1等陸佐）。東京五輪開会式で指揮。1966年、中央音楽隊退職（退官）。子息（長男）が本学在籍し、父兄会理事を務めたことが縁となり、8年前に本学吹奏楽団の指揮を委嘱される。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年9月15日、299号、1面所収。

「斎藤さんの音楽人生は、楽記にいう『楽は楽（らく）なり』を貫いた人のように思われた。『私は運がよかった』という。四百五十人の志願者の中から選ばれた十人の一人として陸軍戸山学校軍楽生徒となった少年が、やがて五百五十人編成の空前の大バンドを指揮して東京オリンピック開会式のセレモニーを盛り上げ、さらにこの十月には本学吹奏楽団を率い、日本商工会議所開設百年記念大会郷土祭の入場行進に再び国立競技場で指揮棒をふるうのだから…だがその間には戦後の暗い谷間もあった。『戸山学校で教官をしていたときに終戦になり、家族は疎開中で身一

つになりましたが、自分にはクラリネットという支えがありましたので、しばらく東京放送管弦楽団に加わり、ほかに音楽のアルバイトをしたり、大型免許をとってトラックの運転手をしました。…二十八年発足早々の自衛隊音楽隊へ参加を勧められ、月給一万七千五百円の音楽隊に喜んで参加しました。…平和になって『世界の共通語（音楽）を使える音楽隊』と認められたことを何より喜んで張り切った。東京オリンピックの大役を果たして間もなく定年を前に後進に道をあけて退官した。学園の指揮者に迎えられたのは、長男在学中の本学の父兄会理事を務めたのが縁だった。それから八年…もともと一業に徹することが信条で、『いろいろな技能をやってどれも人並み以上にこなす器用よりも、無器用でも年数をかけて一つのことをやっこさ覚えこむ人の方が好ましい』そうで、だから楽団の学生にも、四年間をやりぬけ、いやになったら小休止をしてもいいからやりぬけ、と教える。『自分で苦勞してやりぬくことで人間は成長していくのですから。芸能人になん、若さとバイタリティーに満ちた演奏を聞かせてくれればそれでいいと思います。だから細かいことは教えません』。昨秋の銀座の『光のパレード』のさいの演奏ぶりが認められて、さきごろライオンズクラブ世界大会代々木パレードではフランス代表団の先導バンドに選ばれたうえ、パレード後のコンテストで優勝し、つづいて十月二十二日には商工会議所記念大会に東京消防庁の楽団と並んで大任を担うことになった」

1-6 大東人：永山勇（文学部長に就任した）

略歴：茨城県出身。東京文理科大学国語学国文学科卒。宮城師範学校、東京教育大学、山形大学教授などを歴任。山形大学名誉教授。1974年本学教授。文学博士。国語国文学を専攻。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年10月15日、300号、1面所収。

「宮城師範を卒業して小学校の先生になったが、すぐ水戸歩兵第二連隊へ入営した。…五ヵ月間の軍隊生活をしただけで伍長に進級して除隊し

た…永山訓導は除隊後七ヵ月小学生を教えただけで東京高等師範へ進み高師－文理大六年間の課程を了えて宮城師範の教諭、さらに、昭和十二年、…転じて陸軍士官学校の教壇へ立つことになる。…国語研究・国語教育ひと筋の半生だったことが伺われる。『国語意識史の研究』は東京教育大へ提出した学位論文を刊行したもので、古代から近世初めまでの日本人が国語についてどんな認識、自覚をもち、それがどう変遷、展開したかを〔古事〕記・〔日本書〕紀・万葉〔集〕・風土記などの古典をはじめ、各時代の資料に基づき、二十年にわたる研究をまとめた労作だった。『形の無い声が、ある一つの言葉になるとそれが人を喜ばせ、悲しませ、怒らせおびえさせる力をもち、あるときは祝い、あるときは呪いとなって人の心を左右する。古代の人びとは“言霊のさきはう国”“言霊の助くる国”と語りついで言葉のもつ霊妙さを信仰したが、私が研究を始めた動機もこれに似ている』と〔永山〕先生は述懐する。当時教育大教授だった佐伯梅友前本学学長はこの書に『この著者にして初めて組織立てられたもので、その功は大きい』と序言を贈った。…『正しく読むのは国語学者や古代史学者の仕事になるわけですが、それには手順が必要で一朝一夕にはいきません。字画や読み方が明確でない文字が一つでも残っていれば、時にはその解明だけに何ヵ月もかかるのです。手を尽くし、研究を尽くしたあとで結論を出す、それが学問研究というものなのです』。一つの著作に二十年の歳月をかけた人の言葉らしく、雑音に動じない重味がある」

1-7 大東人：藤沢信雄（モスクワ五輪を目ざす）

略歴：1975年度、本学経済学部経済学科卒。東松山校舎学生課員兼レスリング部コーチ。経済学科2～4年生の時、3年連続でフリースタイル48キロ級学生選手権制覇。卒業後、学生課職員兼レスリング部コーチとなり、連続して全日本選手権フリースタイル48キロ級制覇。世界選手権でもメダルを獲得する。1980年のモスクワ五輪を目ざす。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年11月15日、301号、1面所収。

「藤沢さんは最軽量級。生れつきの小柄とはいえ、高校時代から算えて十年近くを不動の48キロ級で通している裏にはそれなりの苦勞が…と、まずその詮索から始めた。『高校で習い始めたときは四十四キロ、今は平常五十四キロです。常に食事を加減して平均体重を押えつつける方法もありますが、私は試合の一ヵ月前からじわじわ減量するようにしています。その方が私の場合は楽ですし効果的です。しかし、何が苦しいかと聞かれるとやはり減量ですね。…減量がうまくいくと空腹感がありますが、よくないとノドの渇きが先に立って、どうにも耐えられなくなります。空腹は我慢できても渇きは我慢できませんからね』。…勝つためだけの肉体管理は不健康、と批判したことを話題にすると『ソ連のやり方はよく知りませんが、一般的に言って、それは本人の考えしだいではないでしょうか。当人が試合に勝つためにそうしたいと考えるならそれでもいいと思います。選手自身にその気がなければとても減量の苦しみに耐えられないでしょう』。それは、“まず自分に克つこと”という競技のセオリーを、苦痛を越えて実践しつつける男の自負ともとれる言葉だった。…高校へ入ってレスリング部へ入った。同じ格闘技でも柔道や相撲は柔道着やマワシをにぎり合うのでそれなりの体格と体重がないとだめだが、レスリングパンツ一枚で取組み、しかも階級がはっきり分かれているこの競技が好ましかった。二年生のとき国体高校の部で三位になって勝つ味を覚え、この道をやれるところまで突き進んでみようと思心にきめたという。胸の羅針盤は今もなおその一点を指して揺るがない。高校三年間、大学四年間、そして社会人としての二年半、多くの若者が生きる目標を失っているといわれるこの時代に、身も心もレスリングに集中して飽くことを知らないこの人も今は二十五歳。『年齢からみて選手としてマットに上げられるのもあと三、四年でしょう。三分三ラウンドの試合時間を全力で闘うにはまずスタミナがなくてはなりませんが、体力に限界がきてもそれを補う技術があればなおしばらくはやっていけると思っています。学生のころはスタミナ（プラス）技術、そのあとは技術（プラス）スタ

ミナという図式で考えてモスクワオリンピックまでがんばるつもりです。いつごろからか、勝ったときの喜びばかりでなく、負けたときのくやしきの中にも研究材料をみつける張り合いを感じるようになりました。キャリアというものでしょうか。相手の息づかいでその疲れぐあいがわかるようになりました』。家族と離れて東松山教職員宿舎で一人住い。毎朝八～十キロを走り、学生相手のスパーリングも欠かさない。…今のライバルはこの夏メキシコで敗れたソ連の選手だが、国外、国内を問わず、どんな強い選手が忽然と現れるかも知れないのが格闘技の常である。…脂がのっている藤沢さんにもモスクワへの道はなお険しい」

1-8 大東人：川口久雄（北國文化賞を贈られた）

略歴：東京文理科大学文学科卒。金沢高等師範学校及び金沢大学法文学部教授を歴任。金沢大学名誉教授。文学博士。1976年4月から本学へ来講。東洋研究所教授・専任研究員。平安文学と中国の古仏教との関係史を研究。さきごろ北國文化賞（北國新聞社）を贈られた。インタビュー：『大東文化』1978（昭和53）年12月15日、302号、1面所収。

「金剛杖について立山へ登った十代にさかのぼる。南に白山、東に立山連峰を遠望する金沢育ちの[川口]先生は、このときの感激が忘れられず、東京高師＝東京文理大へ進むと、さっそく山岳部へ入って信越の山へ登った。当時はどの山も登山者は稀だった。…[東京文理科]大学は国語国文学科だったが、中等学校の国語・漢文の教員になるためということで、ひたすら日本や中国の古典を読まされた。[川口]先生は、漢文の諸橋徹次教授[、]英文学の福原麟太郎の授業を熱心に聴いた。和漢の文学を関連させた諸橋教授の闊達な講義は、とりわけ魅力があったという。卒業してまもなく陸軍士官学校の一般教養の教官になる。同僚に現文学部長の永山[勇]教授がいた。終戦前に新設の金沢高師へ移り、立山へ登り直した。[昭和]二十三年、京都大学人文科学研究所へ内地研究員として出向した折りに内藤湖南教授らが、大正初期にヨーロッパから持[ち]帰った数枚の

敦煌資料写真を目にして興味をもった。変文との邂逅である。『あそこ
敦煌の変文という新しいジャンルが紹介され始めて、これは要するに謎
解きなんですね。変は絵という意味らしく、それに対する文章が変文で
す。布教に使われた仏教画で、これは民衆文学ですから普通は後世まで
残りにくいものですが、これが敦煌の石窟からどんどん出てきたわけ
です。京大で見たのはほんの数片の敦煌の類書の残巻の写真ですが、ほか
の大量の敦煌資料の中には、必ずや同時代の日本の物語絵のなかみやか
たちを明かにするものがありはしまいか、と思いついたのです』。そんな
思いを抱いてさらに十年、三十四年に井上[靖]氏の小説『敦煌』が世に
出た。小説の中には井上氏のいう“自己流の変文”がはめこまれていた。
川口先生が『平安朝の日本漢文学史の研究』で学位をとって教授に昇進
し、同じ標題の著書で中日文化賞（中部日本新聞社）を贈られた時期だっ
た。…六年前からソ連、英、仏、インド、中国と毎年旅行をつづけ、英、
仏は留学以来四たび訪れた。変文追求の行脚である。変文が同時代の平
安朝の物語や絵巻に具体的にどのように関連しているか…『共通の要素
はたくさんありますが、それが相互にどうかかわっているかはもっと研
究が必要です。話が似ているからというだけで源流がどうの影響がどう
のというのは短絡に過ぎます。同じ内容の話が併立していたとも考えら
れますからね』。少し間をおいて『草薙の剣で野火を防ぐ話とか、聖徳太
子が富士山へ登る話とか、日本の神話の素材と敦煌変文と似たような絵
や話がすくなくないことは確かです』と言葉をついだ

1-9 大東人：栗洲アーンショウ（書道の個展を開く）

略歴：本学聴講生。本学主催の全国書道展金賞受賞。母国英国へ帰国
してケンブリッジ大学に復学し、寺子屋を開き書道の普及を目ざす。イン
タビュー：『大東文化』1979（昭和54）年1月15日、303号、1面所収。

「英国人、本名はクリストファー・アーンショウ、二十五歳。『栗洲』
は書道の手ほどきをしてくれた成瀬映山先生が通称クリスにちなんでつ

けてくれた雅号で、自分でも気に入っている。…小学校から高校まで全寮制の私立学校で過ごした。ケンブリッジ大学のキリスト・カレッジ入学と同時に奨学金をもらってフランスへ渡った。ニース大学でフランス文学の研究に手をつけたが、八カ月後には平坦な研究者の道を捨てて“冒険者”の道を選ぶ決心をした。…ニースでは海岸のテント生活をし、デパートでアルバイトをしてためた十二万円を旅費にあてた。東南アジアのどこかの国へと考えたすえ、冒険を志すからには、外国人にいちばんむずかしい日本語に“チャレンジ”しようと日本を選んだ。四年前の六月、虎の子の十二万円をポケットに來日した。…英語学校の講師の口をみつけて英会話を教える一方、自分も新宿住友ビルの朝日カルチャーセンターで日本語を習う。そこの書道教室で、好奇心からふと筆を握ったのが書道との出会いになる。成瀬先生や桑田笹舟先生が珍しい外人の『寺子』（クリス君の好きな表現）を念入りに教えてくれた。…『結局、書道に落ちついたのは先生方が手をとって親切に教えてくれたからです。筆と墨と白い紙の三つだけで自分の心を自由に表現できる書に魅せられたのも確かですが、手の上に手を重ねて運筆をしてくれた先生の手のぬくもりが私をこの道に呼び入れてくれたのだと思います』と、異郷のスキンシップ（『イギリスにはこんな英語はありません』とのこと）の感銘を強調した。一年経って、『大東書道』の競書へ投稿したのが縁で本学の聴講生になる。斯界随一の教授陣について本格的に書道に打ち込んで三年、七級から始めて特級までのほりつめ、昨年七月、資格認定試験をパスして外人では初めての教育部書道教授者の資格証を手にした。『油絵はいろいろカラーを使うけれど、書は墨のほかは朱印だけで、変化をつけるのがむずかしい。でもそれで静とか品格とか、時にはドラマチックな表現が可能だから奥が深い。浜辺は浅いけれど、しだいに深くなって無限に伸びていく海のように感じています』。…帰国を前に、二月十六日から二十日まで、半蔵門の東条会館で個展を開き、五十点ほどの作品を日本の人にみてもらおうそうだ」

1-10 大東人：香坂順一（語学交流を推進する）

略歴：栃木県出身。東京外国語大学支那語部文科卒。台北高等商業学校助教授（広東語習得のため、嶺南大学へ留学）を経て、敗戦後は、台湾政府の法政学院流用教授として現地人らに北京語を教える。1948年、帰国。1950年から、大阪市立大学文学部教授。1973年、北京大学客員教授。1976年、本学中国語学科兼任講師。翌77年、本学中国語学科教授。1972年から、NHKのテレビ・ラジオの中国語講座を担当する。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年2月15日、304号、1面所収。

「六四年（昭和三十九年）日本文化人代表訪中団に参加して以来何度か日中の空を香港経由で往来し、七三年に大阪市立大教授の現職のまま北京大学客員教授に〔香坂先生は〕招聘された。田中首相の訪中で国交正常化ができた年のことである。…困難に耐えながら日中語学交流の細いパイプを守り通した日本側のパイロットの先頭に立って奔走していた〔香坂〕先生にとって、戦後初の日本人教授として北京大学の教壇に立ったその日の北京の空は、ひとしお美しかったに相違ない。…客員教授生活のつづき、また国際的に〔招かれ〕…広く中国人の日本語教育の進め方を研究する会議のオブザーバーとしてであった。…飛躍的な国際交流を図っている中国ではいま、外国語の研修に力を入れ、国民の関心も高い。『しかし…』と〔香坂〕先生は両方の腕を机の上で組み交した。『…“中体西用”の伝統があって、まず自分たちの役に立つということを第一に考えるので、その伝統に基いて構成された教授法を語学でも保守する傾向があるのです。合理的な進んだ教授法を紹介されても、それが自分たちに有効性があるかどうかを見きわめてからでないと受入れません。新しいものには草木もなびくといった民族性ではなく、革命後三十年の今も個人的には保守性が強く残っています』。…栃木県大田原中学生のとき、中国の青島中学（日本系）から転任してきた先生から課外に中国語を教わって興味をつのらせ、東京外語大へ入る。大陸雄飛の野望などさらさなく、卒業後は語学教育一途をたどる。…二十六年間勤めた大阪市立大を退職

して一昨年本学へ招かれた。「…建学の精神とか儒学の伝統とかの言葉が出るけれど、大多数の学生は漢学とは無縁ですね。ミッション系の学校では選択にしる全学生がバイブルを読むのに、本学では四書を読む機会さえ与えられない。儒教には民主主義にそぐわない点があるのだから、儒学を洗い直して今の日本に役立てることができないものではないのでしょうか…。中学時代、大東文化学院の名に関心が深かったという[香坂]先生の提言である」

1-11 大東人：服部秀一（法学部長に再任された）

略歴：愛知県名古屋市出身。九州大学法文学部法律学専攻卒。名古屋高等商業学校、愛知青年師範学校、岡崎高等師範学校教授などを介し、戦後、岐阜大学教授。1972年、岐阜大学停年退職。岐阜大学名誉教授。1973年、本学法学部教授。1975年、法学部長に就任。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年5月15日、306号、1面所収。

「[服部]先生が九州[帝国]大学へ入学したのは昭和七年で、この年五・一五事件があり、卒業の一年後には二・二六事件が起きた。…いわば、二つの暗い事件の狭間の時期に大学生活を過ごされたのだが、不安定な世相にもかかわらず、玄界灘の太陽は常に変らず青春の群像に明るい日射しを浴びせていた。『山田鉦道君という同級生がいて、生活態度が似ていたので、しばらく一緒に下宿した。山田君は…質素儉約そのもので、酒を呑んで騒ぐこともせず、まじめな人間だった。私が香椎の下宿へ移ってからも親交は変わらず、共に福岡の禅寺へこもって、座禅を通じて人生の意義を見つけようとしたこともあった。またほかの心の通った同級生二人を加えた四人がよく集まって話を交し、テニスに興じ、小旅行をしたこともあった。卒業して山田君は国策会社の北支開発に職を得て大陸へ渡り、私は東京で教職に就いた』…[服部]先生はまず、心を許し合った友の一人について懐しげに語りついだ。…服部先生は専門学校の名古

屋高商から[帝国]大学法学部という、異色の進路をとったが、それは論理的思考に向いている自らの資質を、学問研究の面で伸ばしたいと思ったからだそうで、やがてこれが教育者と研究者の道へ進むことにつながっていった。『どんな世になっても、人間形成のための教育は家庭、学校を問わず必要であり、教育に終点はない。青少年教育が崇高だといわれるのは、まさに、その点です』と、[服部]先生の信念は今も変わらない

1-12 大東人：石井勲（青桐幼稚園長になった）

略歴：山梨県出身。大東文化学院本科14期、高等科17期卒。陸軍航空本部副官（少尉）。戦後、山梨県立都留高等学校、東京都八王子市立第四中学校教諭。教育委員会指導主事を経て、新宿区立淀橋第一小学校、新宿区立四谷第七小学校、新宿区立東山小学校教諭を歴任。1967年、本学文学部講師。1970年、本学幼少教育研究所長。1975年以降、ヨーロッパ教育視察旅行団長として出向。1979年5月、本学附属青桐幼稚園長。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年6月15日、307号、1面所収。

「八年前の五月、フィラデルフィアで開かれた人間能力開発世界会議で[石井]先生が発表した『漢字による幼少教育の研究』が金賞を受けた。それは、人類の進歩に貢献する研究として高く評価された結果だが、漢字の研究がなぜ世界全人類の進歩につながるのか、さらにその後、アメリカや西欧など、日本語を知らない国の子供たちが石井式の漢字教育を受けているのはなぜか、まずその辺のことを[石井先生に]質問すると『幼児の漢字教育というと、小学校で習う字を先取りして暗記させることのように思われがちですが、幼児にとって漢字は、カナよりも覚えやすい文字です。その覚えやすい漢字を素材にして幼児の知能を向上させ、読解力を高めようというのが私の方式です。…漢字は部首別で、一つの部首のもとに親戚筋の文字がずらっと並んでいます。この特性を生かして教育すると、子供たちは推理を働かせて、楽しみながら漢字を覚え、思考力をつけて知能を高めていきます』。…旧制の中学校で石井先生は国漢

より数学の方が好きだったという。元来が理詰めの人となりで、丸暗記の漢字書き取りはとくに苦手だった。それが四年生のとき、「字は書けなくても、読んでわかればいい」という、おおらかな漢文担任の先生の影響で漢文にひかれ、大東文化学院へ進んだ。高等科で岡井慎吾教授の説文の講義ぶりに感銘し、こういう風に勉強すれば誰にでも漢字が覚えられる、と悟るところがあった。「僕はもともと、皆が当りまえのこととしてやっていることを見直すくせがありましてね。そうすると、従来のしきたりの中の不合理なものがはっきり見えてくるのです。…最初が高校で次が中学、そして小学校、こんどは幼稚園（まさに野球のサイクル・ヒットである）でもそれは一つに漢字教育のためでした。長男が二歳くらいのころ、教えもしないのに漢字をよく覚えるのに気づき、幼児教育は、カナから始めなくてもいいのではないか。たとえば、社会では使わない“がっこう”という表記を教えるよりも、学校と教える方が幼児には覚えやすく読みやすいのではないかと考えたのです。漢字の方がカナより思考を刺激し、関心を高める点で、九九を暗記することよりむしろ数学的思考を含んでいて、他の教科への波及効果も大きいように思えたのです。そして、その思いつきを逆の順序で確かめるために中学へ、さらに小学校へと転じて実地に漢字教育を試み、データを積み重ねながら幼少教育への間をつめていきました」。実地教育といっても、公立学校では文部省の指導要領にしばられて、十分な実践の場が得られなかった。十三年前に小学校の教壇を離れて母校の本学へ移り、四十五年に設立された幼少教育研究所の初代所長として、全国的規模の普及活動に乗り出した。…幼児に接する機会は少なかった[石井]先生が[青桐]幼稚園長になった。「人頼みにしていた実践データもこれからは直接集められるのでありがたい。若い先生方も一生懸命やりましょと協力を約束してくれたので力強い。きょうも午前中、これを使って園児と遊んできましたよ」と、三枚の厚紙のカードを取り出した。川、猿、狸と大きな墨の文字。…話につれてカードを動かすと、児童にはその文字が実物化して動画のように躍動して見

えるという」

1-13 大東人：楊名時 (34年ぶりに母国を訪問した)

略歴：中国山西省五台县古城府出身。京都大学法学部卒。1966年、本学文学部・外国語学部講師。明治学院大学、都立大などを始め、NHKテレビ中国語講座講師。1978年、本学で初めての外国人専任教授。八段錦・太極拳友好会長として、アサヒカルチャーセンターなどの太極拳教室へ出講している。日本空手協会師範。空手五段。インタビュー：『大東文化』1979(昭和54)年7月15日、308号、1面所収。

「ちょうど一年前の七月十二日、楊先生は三十四年ぶりの祖国訪問の旅に出発した。永く閉ざされていた交流の道が数年前の国交回復によってようやく開かれたのに続いて、平和友好条約の締結を一ヵ月後にひかえた時期であった。在日多年にわたって語学教育と、太極拳を通して蓄積した先生の日中文化交流への努力に報いる中国側の招待による三週間の旅行は『祖国の心尽くしの歓待を受け、身に余る光栄と思った』という。その感激ぶりが思いやられる。…『私も家風に従って二、三歳から伝統の武術である太極拳を習い覚えました。父がたばこ会社の社長になって首都太原へ移ったので小学校から高校まで太原で新しい教育を受け、十八歳のとき省の官費留学生に選ばれて日本へきました』。特設の東亜高校を経て京都帝国大学法学部政治学科へ。志したのは外交官だったが終戦後の混乱のさなかで給費もとだえ、生きていくのが精一杯の日日であった。華僑経営の大阪中学校の教壇にアルバイト先を得て、二十三年に大学を卒業した。折りしも祖国は国共共同勢力の内戦がつづいて帰国の目安が立たないまま、大阪国際新聞社華文局文化課長に迎えられて大阪で三年、ついで東京中華学校教員・訓育主任から、二十七歳で校長に昇任し、三十代は一転して早大中国研究会講師を手始めにNHK国際局ライター、中国語研修学校、善隣書院の各講師などをしながら日本の親中国派の人たちとの交流を深めていく。…[楊]先生にとって、勉学と太極拳は一体

であった。それがいま、大学教授であるとともに八段錦・太極拳友好会長でもある先生を形成している。『私の太極拳は実戦用の武術である太極拳を健康本位の体操に再構成した独特なものです。からだを柔らかく丸やかに、ゆっくりと動かすのが基本で、そのねらいは意識、動作、呼吸の三つが一つになって気血の流れを長くすることにあります。初めに八段錦という簡単な柔軟体操をして関節をほぐします。これだけでも効果がありますよ』。と健康を強調し、『健康即幸福ではないかもしれないが、健康でなければ幸福はない』ともいう。みんなの健康、幸せを願いながら動くことは、結果的に自分のそれらに通じると信じているからである」

1-14 大東人：時枝満康（新理事長は第1期生）

略歴：福岡県飯塚市出身。大東文化学院本科1期、高等科5期卒。専修商業学校教諭、同校理事、校長のかたわら大東文化協会理事。1952年から共立女子学園教務課長に就任し、学法一橋学院理事、大東文化学園理事などを兼ねた。1979年7月、本学理事長に就任。インタビュー：「大東文化」1979（昭和54）年9月15日、309号、1面所収。

「九段の大東文化学院本科へ入学されたのは大正十三年だった。『生家が代々の神職だったので國學院大學を受験するつもりで九州から上京したところ、漢文専攻の専門学校が一期生を募集しているという新聞記事を見て、国文より漢文の方が広がりがありそうだと考え直して受験しました。授業料なし、教材と学資支給という好条件だったので志願者が多く、合格者の中には小学校の校長をやめて北海道から出てきた人もいました。給費は本科生が月額三十五円、高等科は六、七十円でした。六畳間、二食付きの下宿代が二十五円のことですから、若い学生の生活はまずまずだったけれど、家族もちの年配者は学校で筆写のアルバイトをする人もいました…』。中野区野方町の一角、ま新しい白壁のお宅でのインタビューである。和風の庭に面した洋間の簡素なたたずまいによく似合う白シャツ姿の時枝さんは、持ちまへのにこやかな表情と、静かな語り口で、

しばらくは聞き手の暑さを忘れさせた。『病気で一年休学したため、七年かかって本科と高等科を卒業し、学校からは郷里の直方高等女学校教諭に行かないかという話がありました。就職難の時代でしたが、どうしても東京を離れたくない気持[ち]があって自分で専修商業の口をみつけました。これが昭和六年で、専修には二十七年までいて戦後の復興に苦労しました』。時枝さんの“戦後の復興”は専修だけにとどまらなかった。『大東の池袋校舎が空襲で丸焼けになったあと、校舎がなくて授業再開に難渋しているという話を耳にして、大日本機械会社、これは専修の生徒の勤労働員先でしたが、そこで青砥（葛飾区）の工員訓練所の跡の建物を貸せるなり売るなりしたい意向のあることを大東へ伝えてやりました。この話がまとまって、二十一年春から青砥校舎時代に入りました。私は橋渡しをしただけですが、大東では酒井（忠正）総長が戦犯に問われて巣鴨へ連行されたあと、酒井邸の臨時校舎の明け渡しを迫られていた際だったので、皆さんに喜んでもらえたことは確かです。この折りからまた大東へ関係するようになったわけです』。青砥校舎時代の大東を襲ったものが二つあった。キャサリン台風（22年9月）と新制大学昇格保留（24年2月）である。台風は校地を水びたしにしたうえ、学生たちの寄附金で協議中の図書館を倒壊させた。大東の命運を賭けた昇格問題は文部省の審査委員会です実上の不認可となり、再審査申請も却下された。さし迫った学生募集ができず存亡の危機に直面した。『鶴沢（総明）前総長（当時明大総長）から、明治大学文学部へ合併したらどうかという案が出て、理事者間にも賛成するものが多かったが、私としては、そうなのは同窓生に対して申し訳ない非常に苦慮したすえ、同郷の先輩である審査委員の加藤一雄氏を訪問し、認可の障害は、『大東』の校名が良くない、校舎の環境が適当でない、独立した図書館設備がない、の三点にあることを確認しました。そこで校名は文政大学とし、校舎を池袋の旧校地へ移して設備を整えることを条件に再審査を懇願し、加藤氏の計らいによって辛うじて認可を得ることができました』。…『細々ながら命脈をつなぐ

ことが先決であって、そうなれば誰かが、いつか建学の精神を体して復興してくれるであろう、これが同窓生の責務と考えて行動しました』と結んだ。半世紀を越える母校の歴史の中で、節目のたびに見事な登場ぶりをみせたこの人が、こんどは経営の最高責任を担うことになった。『…私学は教育と経営の二つの面の均衡を失うと必ず破綻します。本学園は経済成長に伴って順調に規模を拡大してきましたが、拡大一途の方策が今後もうまくいくとは限りません。世にいう減速経営にも気を配らなければならない時期にきていると思います。…どんな形であれ、借金のある学園は健全なあり方ではありません。将来の飛躍のための基礎固めが私の任期中の使命と考えております』。…おさんは結婚して独立している。教職の人は、一人もいない。『私の貧乏ぐらしをみていて嫌ったのでしょう』と笑った。一昨年共立女子学園を定年退職したあと、『ゆっくり本を読むつもりだったのが昨年は家の改築に時間をとられ、つづいての学園づとめで…』と残念そう。“古の学者は己れの為にし、今の学者は人の為にす”という論語の一節をひいて、『人に教えるための読書が多かったから、これからは自分の読書をと考えています』ともいわれた

1-15 大東人：萩谷朴（『平安朝歌合大成』10巻を復刊した）

略歴：大阪府出身。東京帝国大学文学部国文学科卒。同大学院修了。二松学舎専門学校、二松学舎大学、女子聖学院短期大学教授を経て、1969年4月から本学教授。1972年から、文学部日本文学科主任。1976年から、大学院文学研究科委員長。著書のうち、『平安朝歌合大成』第1巻に対して、第2回東京大学国語国文学会賞（1957年）、『枕草子』に対して、第9回新潮日本文学大賞（1977年）を受賞。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年10月15日、310号、1面所収。

「今年、昭和三十二年から四十四年まで継続出版した大著『平安朝歌合大成』十巻を京都の書店から復刊した。…『平安朝歌合大成』は四百字詰原稿用紙一万五千枚の執筆と同時に編集ワリツケ、校正、進行、宣伝、

発送、請求、領収のすべてを十三年間にわたって単独でなしとげただけに、数多い著書の中でも[萩谷]先生にとって最も苦辛と思いの多い本である。太平洋戦争が終わったとき[萩谷]先生はスマトラ島駐留の近衛師団の一兵卒として現地人の生産業務の監督をしていた。木材、塩、石鹼、干魚などの作業場を見回る役だったので、マレー語をしゃべることの方が多かった。“マッカーサー兵長”で一年後帰還し、戦災で焼けた二松学舎専門学校へ戻ったが、給料はごくわずか。東[京帝]大の恩師池田亀鑑博士の配慮で朝日古典全書のスタッフに加わって『土佐日記-貫之全集-』を担当することとなり、編集部から隔月三千円ずつ前借りしているうちに『[萩谷]先生の印税分はこれまで』と編集長にいい渡される。二年後に刊行し、これが自分の名前での著書第一号になるのだが、戦地ボケで学術用語が思い出せず、解説を書くのに苦勞したという。…前借りで[お金が]なくなっていたので、NHK ラジオに無名原稿を毎日書きつづけたり、歳末配布用の家庭重宝暦を編集・出版して銀行や社寺へ売り込む内職をした。…[帝国]大学へ入学した当座は『平安朝文学でもやってみようか』という程度の気持[ち]だったそうだが、いったん、のめりこんだ歌合の研究から脱け出すことができず、大学、大学院の七年間をその中で過ごした。従軍三年七カ月、そして戦後十年。『二松学舎の復興、給料無配の中での家族扶養という、八割方は雑務に時間をとられながらも平安朝歌合の全面調査とその出版という大仕事を諦めきれずにいたのは、歌合の古筆文献について凡ゆる便宜と指導を与えて下さった故田中親美先生と、発見当時の近衛家文書整理主任故井川定慶さんに対する報恩の気持[ち]が、歌合からの逃亡を私に許さなかったからです』。そして二十九年、歌合大成全十巻という壮大な規模を予想しながら、限定五百部、会員制という私家版を決意する。『毎年一卷をまとめて継続刊行するという五百人の会員との約束を、自らの手カセ、足カセにすることが将来への前進に必要な条件と考えたから』という。毎日の睡眠時間が三時間半から四時間半という強行軍をつづけて、三年後に第一巻を刊行し、それが東大国語

国文学会賞に選ばれた」

1-16 大東人：中村利之（第57回大東祭実行委員長）

略歴：千葉県出身。本学文学部教育学科3年。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年11月15日、311号、1面所収。

「大東祭が終って二日後の夕方、板橋校舎の広報センターでのインタビューである。…百三十を越した参加団体が残したゴミの山は、きのう、きょうとトラック八台で焼却場へ運んでなお運びきれない量だという。—そこまであなた方がやらなければならないのか、という『何しろ“実行”委員会ですから』と笑った。大東祭実行委員会の顔ぶれは毎年五月下旬の自治会代議員会のあと発表されるので、事情にうとい記者は、委員は全学生の中から選挙か何かで選出されるものと思っていたが、実は年間を通じての常設サークルだという。つまりほかのクラブやグループと同じくきまった部員（今年は二十七人）がいて平素から大東祭の運営について研究、伝承し、五月にその中で実行委員会委員長以下のスタッフを構成し、自治会代議員会の承認を得たうえ、その年の大東祭の準備から運営までの万端をとりしきる。経費は自治会から交付される予算のほか大学、父兄会、同窓会などの助成金で賄う。『数百万円規模の金を扱うからには、ちゃんと手続きを踏んだ役員がやるべきでしょうが、経験がないとわからない点が多いし、文化祭の内容が偏向しないようにとの考慮もあって今の形になっているようです。だから私たちは一年生のときから先輩について大東祭の在り方を勉強しかつ中立の立場を守っています』と熱っぽく説明してくれた。六月上旬、各クラブの代表者を招いて参加団体を確かめ、今年の開催方針を説明した。参加団体は年々ふえつづけるのに、会場になる教室が少ないのが慢性的な悩みになっている。この悩みは研究管理棟が完成する来年はいくらかゆとりができそうだが、—もっと大きな問題は学生の全員参加でしょう、と古くて新しい大東祭の泣きどころを聞くと『実のところ、大東祭へ一度でも顔を見せる学生

は半数位でしょう。連休を利用して帰郷したり旅行に出してしまう残り半数の学生を引き止めるために、今年は長期計画の初年度のつもりで東上線の各駅へ大東祭のポスターを出し、校内放送を連日流しつづけました。一割でも二割でもふえてほしいと願ったのです。大東祭を魅力あるものに育てながらこういう努力を毎年つづけていけば、いつかは全員参加が実現するでしょう。』。とはいうものの、その語尾は力がなかった。教育行事に対する一群の学生の無関心さに歯ざしりしながら、どうしようもない自分たちの無力さをもどかしがる一人の若者がそこにいた。実行委員会のメンバーは今年初めて、体育祭の前の二十日間、交代で東松山校舎で体育祭実行委員会スタッフと起居を共にして準備作業に協力した。同じ立場で苦勞している学生同士が手を握り合って連帯の輪を広げるためだった。それが終ってすぐ大東祭。－今年は参加団体の部屋割りがキチンとしていて見学しやすかったし、プログラムの編集もよくまとまっていたという評判でしたよ、という『お世辞でもそう言っていただけると仲間が喜ぶでしょう、本当に』と、ボサボサの長い髪を両の手でかき上げた」

1-17 大東人：植松正 (大学院・法学研究科委員長)

略歴：千葉県出身。日本大学法文学部（心理学）卒。東北帝国大学法文学部（法律学）卒。1936年、検事（水戸など）、判事（東京刑事・民事地裁）。1941年台北帝国大学助教授、後に教授。1945年、東京控訴院代理判事。翌46年、東京控訴院検事。東京帝国大学法学部講師（併任）。1950年、一橋大学教授。1969年、一橋大学を停年（名誉教授）。同年、明治学院大学教授。弁護士登録。1975年本学教授。法制審議会委員（少年法部会長）、日本犯罪学会会長を歴任。文学博士。紫綬褒章、NHK放送文化賞を受賞。インタビュー：『大東文化』1979（昭和54）年12月15日、312号、1面所収。

「新聞や雑誌・会報の求めで書いた随想のいくつかをまとめたもので、

十八年間勤務した一橋大を退官されてからの、ここ十年ほどの間に執筆したものが多いが、若いころのものも何篇がある。その一つ『青年期の夢』を抜き書きで紹介すると『芸術を学んでも、思想を論じても、哲学が最後の支柱でなければならない。そう思って、文学少年は哲学青年になりつつあった。大正の末年近く、そのころ、夜間では唯一の大学令による大学であった日本大学の予科に在学して、敬愛措く能わざる近藤金治郎先生の教えを受け、哲学と美学に心を打ち込んだ。そのころの自分は全く青年らしい純粋さで、ただ学問のために勉強するという以外に、これを就職に役立てようなどとは毛頭思わなかった。と同時に、大学者になることを夢見たわけでもなかった。ただ好きだから勉強したいというだけだった。だから私は、昼間はスレート会社の事務員で、夜は苦学青年だった。会社がどんなに忙しくても、午後四時すぎには自分だけさっさと机の上を片付けて、学校へ急いだ。という大変勤勉な生徒のようだが、好きな講義以外は全然聴かなかった。そういう点、私立の夜学校などは、しごく楽なものだった』。…先ごろの叙勲のお祝いを述べると、『ありがとう』と軽く会釈された。－学者になろうと考えられたのはいつごろでしたか。『日大の夜間で心理学を専攻し、卒業と同時に、日大予科の講壇に立ったときは、ひとかどの学者になったような気持[ち]でした。学者病はこのときから本物になったような気がします。しかし、一方で『内分泌の精神現象に及ぼす影響』に関心をもっていたので、医師の資格も得ようかとも考えていました。考えたすえ、要するにレッテルを少しでもよくするために帝大を卒業するのを感じ、高等学校卒業検定試験を受けて東北帝大へ入りました』。…『初めは美学志望でしたが、美学は学生が一、二名という状況だったので、不在[がちな]学生[態度]が発覚しないようにと、途中で学生数の多い法律学専攻に変えました…』。そうって白い菌をみせた。－学者志望のはずが東北大を卒業するとすぐ司法官試補になられたのは…『さしあたり月給は半減だが、判事や検事は終身官だから、もう誰にも頭を下げて就職を頼まなくてもいいというのが魅力でした。検事

を三年余り、判事を一年足らずやったあと、太平洋戦争開戦の年から台北帝大助教授として刑事法学を教えることになりましたが、結局は…東京のわが家は焼け、勤める大学は消滅という非運を味わって、また司法官に逆戻りしました。職はかわってもく正を履んで畏れずの信条は一貫してかわらないという」

1-18 大東人：森直太郎（木曜短歌研究会部長引退を予告した）

略歴：長野県松本市出身。早稲田大学文学部国文学科卒。1938年から、私立錦城学園教諭。同学園副校長。1959年から1年間本学講師。1967年錦城学園を辞して、本学専任講師。1969年文学部日本文学科教授。東京都高校新聞研究会副会長。インタビュー：『大東文化』1980（昭和55）年1月15日、313号、1面所収。

「大学院の飯田正一先生は、森先生について次のように述べている。-[森]先生は本学において和歌文学を講じられてからすでに久しい。その領域は万葉集から近代短歌に至るまで、実に広い。[森]先生は窪田空穂に師事して和歌研究の方法を学んだが、また柳田国男に親炙してその影響をうけた。深い学識と透徹した理論に基づく講義は、学生の敬愛的になっている。…[森]先生が手塩にかけて育てた学内の木曜短歌研究会（通称木短）OBの『むべの花の会』の会員たちは昨年（昭和54）の五月五日、木短結成二十五周年の記念歌会を板橋校舎で開き、併せて[森]先生の古稀を祝った。全国各地から出てきたOBの中には、[森]先生が仲人をしたカップルや名づけ親になった幼児たちがまじっていて、まさに『歌の森一家』大集合のなごやかさだった。『短歌を始めたのは中学の三年のころで、少年雑誌や田舎の新聞の歌壇へ投稿してときどき入賞したり、渡辺実一（故人）という国語の先生に教えてもらったりして調子づきました。渡辺先生は私の卒業の年に学校をやめて大東文化学院の高等科へ入学し、諸橋先生の大漢和辞典編纂の手伝いをされたと聞きました。中学を出てから東京の短歌雑誌の同人になって月々歌を送っていましたが、早稲田へ入学して

窪田空穂先生の教えをうけ、また槻の木会の会員になって先生に歌を見て頂くようになり、お亡くなりになるまで、言い尽くせない学恩、歌恩をこうむりました。中学生のひところは小説家にと心を動かして校友誌に創作を寄せたこともあったが、窪田先生に接して歌の道に心を定めたという。『大学を出て旧制中学の教師になってから、窪田先生の諒解を得たうえで、槻の木会の友人二人とあたらしい短歌雑誌を出す計画を立てたものの、本気で乗り出すこともできずにいるうちに太平洋戦争下になってしまいました』。同じ空穂門下に、谷鼎氏（故人）がいた。谷氏は後に本学日文教授、校歌“流れはとおし”の作詞者、木短の創始者である。やがて森先生が本学へくる橋渡しをした真田但馬氏（本学OB、中文教授、故人）もまた槻の木会の仲間だった。－お若い時から大東との縁が重なっていたわけですね－というと、『私が勤めた中学の前田常吉校長（故人）も大東出身でしてね。こうなる巡り合わせだったんでしょう』と目を細くした。『戦後窪田先生をお訪ねしたらにこやかに迎え下さって、『苦勞をしたね、これから歌を詠めよ』と励まされましたが、それでもしばらくは歌が詠めず、二十九年に真田君らと『隻眼会』をつくって毎月歌会を催すようになって、ようやく“槻の木”へも出詠するようになりました』。…四十二年、本学の教壇に迎えられた〔森〕先生は、さっそく歌の指導を木短の学生たちから頼み込まれた。『断わりきれずに数人の学生の歌を見せてもらったところ、歌なんてもんじゃない。いやだと重ねて辞退したのですがぜひにとせがまれ、それに歌好きの先生方の勧めもあって、しばらくの間ということで引受けました。毎週の歌会、春秋の合宿、歌集の編集とできるだけのことをしてきたつもりですが、それでは自分の時間がなくなるので途中何度か部長をやめることを考えながら、そのつど学生たちに引止められて、つい十三年経ってしまいました』。その〔森〕先生が、さきごろ出た年一回の木短合同歌集“むべの実”の中で、『今年限りで部長をやめる決心をした』と予告した。そしてその理由を『年をとると共にいささか疲れてきたし…それに現在の若い諸君には私のよ

うな古くさい者の助言指導など必要としないほどに自意識が高まっている』と述べている」

1-19 大東人：徳重義明（第30回全国高校駅伝の優勝監督）

略歴：1971年度、本学経済学部経済学科卒。在学中には、陸上競技部に在籍する。大学3年生で、本学体育連合会副会長となる。卒業後、中京商業高等学校社会科教諭。同校で、陸上・駅伝部の監督として指導にあたる。インタビュー：『大東文化』1980（昭和55）年2月15日、314号、1面所収。

「徳重さんは本校経済学科四十七年卒業の陸上競技部OBで、本学[陸上競技部]チームが予選を勝ちぬいて初めて箱根駅伝へ出場した四十三年に、鹿児島実業高校から入学した。この年は十五位だったが翌年は七位へ躍進し、当時の三強（日体大、日大、順天堂大）を追ってきびしい練習を積み重ね、四十七年には順天堂大を抜いてベスト3の一角に食いこんだ。徳重さんはこれを置きみやげに卒業し、中京商業社会科教諭に招かれ、陸上・駅伝部の指導に当たることになった。大学三年時代に体育連合会の副会長をしていた徳重さんは大東文化新聞への寄稿の中で『大東スポーツは新興チームで伝統がない、とよく耳にするけれども、伝統はわれわれが築くものであり、いつかはきっと栄冠をつかむことができる』と、確信に満ちた予言をしたが、事実その通りに本学チームは五十年、五十一年と箱根駅伝に連勝し、全日本大学駅伝対校戦で四連覇の偉業を完遂した。徳重さんの大学四年間の陸上競技部生活は正に制覇への基盤づくりの時期であった。…[勤務する学校は]三十七年の創立で初めは中京高校と称したが、数年後、姉妹校である名古屋の中京商業と名前を交換して相互に名称を変更した。名古屋の中京商（後に中京高）は古くからスポーツで有名だが、岐阜の中京商[勤務校]もそれに劣らず、野球、柔・剣道、体操、庭球、陸上などですぐれた成績を取めている。駅伝は四十五年以降九回県予選を制して全国大会へ出場している。うち七回は徳重さんが

監督になってからだが昨年までの全国順位は七位が最高だった。「いまは四十五人の陸上競技部員のうち二十九人が寮へ入って自炊合宿をしています。駅伝メンバーは全員が寮生です。寮母がいないので寮生が三人ずつ交替で炊事当番をし、練習がすむと買い出しに行き、朝も自分たちで作ったものを食べて登校します。炊事当番は練習より辛いところもありますが、強い選手になる前に立派な高校生になれという私の信条を理解してくれて、互いに励ましあってよくやってくれます。こんなところから自然にチームワークが育っていると思います」。徳重さんも合宿で生徒と寝食を共にしている。“陸の孤島”といわれた徳重さんの大学時代の東松山合宿頃の思い出をまじえながら、「…人格形成の重要な三年間を通して規律正しい生活をさせるには、スポーツの指導とは別の苦勞がありますが、私自身にも得がたい体験を与えてくれます。私は勝利に偶然性はないと思っています。必勝の確信がもてるところまで体力と意識を高め、レースには全員がふだんの力を出しきった必然の結果として勝利が生まれることを信じています。…」そして、レース当日。「…一区の米重がトップに一〇〇メートル差できてくれたとき、しめたと思いました。二区の中島が三人を抜い[て]トップに立ち、作戦通りの展開でした。…」…大会で一区と二区を走った米重修一君と中島稔彦君は本学を志願して地区別試験を受験したそうである」

おわりに

同上のとおり、囲み記事「大東人」で取り上げられた本学関係者19名のインタビュー内容は、現代の大東文化大学にかかわる後進にとっても、大いに学ぶべき点があり示唆に富むものである。たとえば、1-2で取り上げられた佐々木一義（文学部長）は、実は同1978年の7月に急逝され、佐々木の生前の半生を振り返る回顧証言は貴重であろう。東京帝大生時代に、和辻哲郎教授から「富士山のように裾野を広くしておけ」「雑学で

もいいから専門外の本も読んで、しっかりとした土台をこしらえておけ」といった助言を受け、佐々木にとっては人生を左右されるほどの転機となったという。

また1-14で取り上げられている時枝満康(第6代本学理事長)の回顧談は、時枝が大東文化学院本科1期生であったことで、卒業後もずっと本学への並々ならぬ熱い思いから、敗戦の復興時に行き場に難渋していた本学に対し、青砥校舎への移転を橋渡ししたこと、また文部省の新制大学への昇格申請が相当に芳しくなく不認可扱いで憂慮した本学に対し、時枝と知己であった審査委員を通して再審査の協力要請をはかり、学校名や立地・設備環境を含めた大幅な見直しを条件として新制大学が認可されたことなど、本学の命運を左右する大きな節目でのかかわりがとても重要であったといえよう。そのような役割を果たしてきた卒業生の時枝がこんどは理事長となり、「私学は教育と経営の二つの面の均衡を失うと必ず破綻」するとし、本学にとっての自身の任務は「将来の飛躍のための基礎固め」であると明確にしたことは、本学の関係者らも時宜に応じた適切な役割分担があると示唆しているものであろう。

この時期(1978～1979年度)の囲み記事にとどまらず、2023年に創立百周年を迎える本学の歩みにおいて、特徴的な活動や有意義な役割を果たした多くの「大東人」が存在している点も、後進のわれわれはもちろん忘れてはならない。今後も機会があれば、いまだ十分周知されていないような、その他の「大東人」らの足跡にも、ぜひ光をあて着目してみたいと思う。そのような課題意識をもつことは、本学校友の共通認識であると信じたい。

[Introduction of Research Materials]

**The “Daito Jin” Series of Interview Articles
from the University Newspaper “Daito Bunka”
(1978 ~ 1979)**

Muneo Tanimoto